

2020年度 一般選抜中期日程/経済・公共マネジメント学科 英語  
出題の意図と解答の傾向

英語を実際に使用する能力が身につけているかを見るために設問も全て英語とした。

I (160点)

問1 (20点)

【解答例】

Because Big Brother and the Thought Police decide what people must do and think.

【解答の傾向】

“If the diary is ever found, Winston will be punished, possibly killed, by the Thought Police”となる理由をエッセイの内容から正確に読み取り、全体像を把握できるかを問う問題。

下線部はWinstonの個人的行為(日記をつけること)である一方、設問では「Winstonの世界ではなぜ日記をつけることが許されないのか」とあり、行為の主体が「その世界の国民全体」であることに気づかない解答が頻繁に見られた。故に、解答の英作文の主語がBig Brother and the Thought Policeやpeople in the countryでない場合が多かった。また、Big Brotherあるいはthe Thought Policeだけを、また、Winston個人を主語にしたり、動詞がcontrolで終わり目的語がなかったりした。正解者はほぼいない。

下線部の文章の直前にあるHere, dishonesty and betrayal are rewarded, but truth and love are punishedをそのまま解答とするものが半数以上あった。これはWinstonが住む世界の成り立ちを答えるものではなく「報酬や処罰の例」であるので不正解。

Telescreen, hidden microphones, spiesなど、監視の為の「手段」を答えるものが1/3ほど見られた。

Big Brother and the Thought Police control the past as well as the present. という文章を解答に用いるものが多かったが、これは具体性に欠けるので正解とはしなかった。

問2 (25点)

【解答例】

今よりもいい人生を送りたいという夢がなければ、人生は空疎で意味のないものになってしまうだろう。

【解答の傾向】

解答のポイントとなるのは、「夢がなければ、～だろう」という仮定法をふまえた訳にすることと、エッセイの内容を踏まえて“it”が“Life”、つまり「人生」であることを、内容を踏まえて日本語で明示することである。

前者はおおむね理解できており、後者も読み取れていると思われる解答が多かった。ただし、全体を通じて日本語としておかしな訳文が続出したことを指摘しておきたい。

複数の主語が出現するものや、主語と述語が適切に対応していないもの、文を締め括る文末が前半部分の文言や主語と呼応していないなど、日本語として首をひねりたくなる珍解答が種々見られた。なかでも主語に、極端に長い修飾文を書き連ねた解答が散見されたのは、おそらく“it”が指し示すLifeをただ訳出するだけではあきたらず、もしくは本設問が求めていることを誤解して、“it”の解説までしてしまったためであろう。本設問は、翻訳を求めているのであって、“it”の深い説明まで求めているわけではない。

また個々の単語の直訳としては悪くないものの、それらを並べれば、いかにもおかしい文章になっているものがたいへんに多かった。訳文をするからには、少なくとも日本語として文意が通じるように訳出すべきであろう。たとえばLifeを「人生」と訳するほかに、「生活」「暮らし」「命」などと訳出するものが出てきたが、それが文末の“empty”の訳出である「空虚」「空っぽ」「空」「から」「空白」「無駄」などという訳語と組み合わせると、いかにもおかしい表現になるものが多かった。文章としての「体」を為さないものが数多く見られたのは、英文を理解する以前に、日本語の能力が欠けているためであろう。正しい文章を書く訓練をしてもらいたい。

正しい文章という観点から言えば、「助詞」と「読点」の使い方が、極めて杜撰<sup>ずせん</sup>だったことも特筆に値する。「が」「は」「に」「で」「の」など、たった一語の助詞を使い間違えただけで文意はつかめなくなるし、「読点」ひとつでまるきり意味が変わってしまうこともある。もっと慎重に言葉を選んでもらいたい。本設問では、「読点」の代わりなのか、空欄を大きく取った解答がたいへん多かった。スマホ文化のご時世とはいえ、ひどく印象に残った。

### 問3 (20点)

#### 【解答例】

政府が残酷なように見え、国民が自由であるように見えない[思えない]ロシアや中国のようなその他の国々があった。

#### 【解答の傾向】

日本語訳の際に、like Russia and Chinaが挿入句であることを認識し、whereを関係副詞の制限用法として捉え、先行詞countriesを説明するという文法上の能力を問う問題。

半数以上の受験生は、設問部分の全体構造 (there were other countries … [where A and B]) を理解して解答できていた。

他方、関係副詞節の誤訳が多かった。特に、副詞節の後半部の appear to(～見受けられる)+be free 部分を正しく回答できた回答は少なかった。「アピールする」と解答したもの、“to be”に着目したのか「自由になろうとする」と解答したものが多かった。従属節の前半部分の seemed to(～のようだ)と対になっていることに気づけば、理解しやすかったかもしれない。

また、副詞節の前半部は、cruel (残酷) の単語の誤答がわからなかった受験生が多かったようだ。

### 問4 (5点)

#### 【解答例】

f (not so sure)

#### 【解答の傾向】

空所の前後のみでなく問題文全体を読み、話の筋を理解した上で適切な句を選ぶ問題。

「e」(not so delighted) を選択する解答が多かった。正解率は、10～20%ぐらいであった。

### 問5 (30点)

#### 【解答例】

国を支配する人々にとっては権力を握ることそのものが目的であり、(彼らは) 国民[人々]を抑圧することによって権力を保つ。

#### 【解答の傾向】

本設問の対象となった英文の構造はシンプルな重文である。この構造を理解し、文章の初めから順番に、二つの文章から構成されているものとして訳出しているかがポイントである。

解答では半数以上がこの点を理解した訳出となっていたが、「彼らにとって権力の目的と権力を保持することは～」など単文構造での訳出が見られた。

対象となった英文は基礎的な語彙から構成されており、このエッセイ全体のテーマと文脈に合わせて日英双方での語彙の運用力で差が出た。キーワードとなったのが“power（権力、支配力）”である。“power”を機械的に「力」として訳出した解答は、定型的な言い回しである“hold power”についても「力を持つ」「力を抱く」と訳出してしまっていた。一方、日本語の運用力という点では“power itself”を「権力それ自身」と訳す解答が多かったが、「権力それ自体」としたい。

最大の難関は“them”とは具体的に何を指しているのかを明らかにして訳出する課題で、「支配」「監視」「統制」「正体の見えない権力」をテーマとするエッセイの内容を読みこなしているかが試された。“them”とは“the Party, the people at the top”を指しているが、これが具体的にどのような人たちかを的確に訳出できるかを問うた。「党」とはビッグブラザーに率いられる「党」のことであり、国民を支配、統制する人々のことである。

解答の傾向は大きく二つに分かれた。ひとつは「政府」「オセアニア政府」「トップに立つ人」「オセアニアの人々」「上層の地位にいる人」という解答である。まったくの誤答というわけではないが、“the Party, the people at the top”の理解としては不十分である。もう一つは直近の文章をそのまま訳出し「個人や感情、幸福、お金のことすら気に欠けない人々」とする解答であり、“the Party, the people at the top”の説明にはならない。正答率は1割以下であった。

## 問6（30点）

### 【解答例】

*1984* shows us that there can be no freedom unless ideas and beliefs can be questioned.

### 【解答の傾向】

*1984*を主語にした文章の後に that 節で仮定の文章を英語で作成すること、次の仮定法過去ではなく仮定の直接法であることを見極めること、適切な助動詞や動詞、名詞を使うことを求める問題。

Unless や if + not を使う解答例とは異なり without を使うものが多かったが、without を接続詞と捉えている、あるいは使い方を間違えている場合は不正解とした。

この文章は直説法で答えるべきだが、仮定法過去・仮定法過去完了を使った解答が半数以上を占めた。

ほとんどの解答で doubt や question という動詞ではなく、wonder を使っていた。これは問の文章には使えない単語である。

*1984*を本のタイトルと認識していないが故に the や the year ofなどを付ける解答が散見された。

「信念(belief)」ではなく、truth など間違えた単語を使用するが多かった。

## 問7（20点）

### 【解答】

A lead    B felt    C fell    D warning

### 【解答の傾向】

全体の文章の流れに即して必要となる基本的な英単語を選び、文法的に適切な形にして答えることができるかを問う問題。この問題には文章読解力と文法能力の両方が求められる。

AとDの正答率が高く、次いでBが高く、Cの正答率はあまり高くなかった。「B: felt」については、「feeled」とする解答が少なからずみられた。「C: fell」については、「grow」の変化形である「grew」とする解答や、「falled」とする解答が少なからずみられた。

## 問8 (10点)

### 【解答】

b (People should never fully trust those in power)

### 【解答の傾向】

問題文全体を通して読み、その流れを理解する必要がある問題。英語の能力だけでなく、日頃から本や新聞といった長い文章を読み、その内容を読解する能力も問われる。

「c」(Human beings should always question the meaning of life)を選択する解答が多かった。正解率は10~15%ぐらいではあった。

## II (40点)

### 【出題の意図】

この問題を通じて受験生は意見や理由を明確に述べられるかどうか、限られた時間内にアイデアを十分に展開させられるかどうか、段落を論理的に構成できるかどうか、また受験生の英語が十分に通じるかどうかを見た。「内容」、「構成」、「言語力」を中心に、40点満点で解答を総合的に採点した。

「内容」については、意見や理由、詳細を十分に説明し、論理的に展開させているかを中心に評価した。「構成」については、論理的展開になっているか、そうさせるための“discourse markers”や接続詞が正確に尚且つ効果的に使われているかどうかを中心に評価した。「言語力」については、解答を読んで意味が理解できるかどうか、文法・語彙・綴り・句読点が正確に適切に使われているかどうか、受験生は難しい言い回しや語彙を使おうとしているかどうか、使った場合はどのくらい正確に使えたかなどを中心に評価を行った。

### 【解答の傾向】

「言語力」について、不満が残る解答が多かった。時制、単数形／複数形、代名詞、語形に関しては誤った使い方が多く見られた他、主語や目的語が抜けている文章も目立った。単語に関しても気になる点が多かった。例えば“data”(データ)を“date”(日付)と間違える解答、犯罪(crime)や犯罪者(criminal)を“claim”、“crim”、“crimer”と間違える解答がよく見られ、不注意や単語力のなさが疑われてしまう。

「内容」については、主張している意見を裏付けるための理由や説明が十分ではない解答が多かった。

イントロダクションの書き方においても気になる点が多かった。設問は、多くの国は防犯カメラの設置を増やしているが、それはよい傾向だと思うかどうかを問うているのに、“I agree that security cameras are increasing”(「防犯カメラの設置が増えているのは確かにその通りだと思う」)と書いた解答が多かった。また、「この傾向が良い」と書こうとするが失敗してしまうイントロダクションの書き方も多かった。例えば、“I think that the number of security cameras is increasing is a good thing”のような間違った書き方がよく見られた。正しい書き方として“I think that the increase in the number of security cameras is a good thing”や“I think that it is good that the number of security cameras is increasing”は挙げられる。